

家族と共に被災地へ

Inoue Uimara

高野山大学教授



春休みを利用して、毎年この時期にボランティアで通っている南三陸の被災地に家族を連れて旅してきました。この三月に訪問した際に防波堤が作られ土盛りが進む被災地の様子を見て、私が大切に思っていて通ってきたものを感じてもらえる最後のチャンスだと思ったので家族に提案してみたところ、妻も子どもたちも快諾してくれて実現しました。

初日は朝早く山梨の家を出て、少しですぐ早く南三陸に着けるように高速道路を

妻と交代で運転しました。圏央道が開通して中央道から東北道までつながってくれているのでスムーズな道のりでした。今回の行程は、いつも私が仙台からレンタカーを借りてボランティアに通う道のりをそのまま辿り、毎回各地でお話を聴かせていただきながら親しくなった皆さんを訪問させていただく道のりです。

閉鎖される仮設住宅

まずは、三陸自動車道を桃生津山で降りて、内陸部にある登米市津山の横山不

に参加して、いよいよ本格的な被災地の現実との直面が始まりました。

七年前の津波では、避難所に指定されていた高台にも津波が到達し、そこからさらに高いところに逃げた人が助かったというケースが少なくありませんでした。そうした現場を案内しながら、チリ沖津波を体験して避難訓練を積んでいた沿岸部の人よりも、これまで津波に襲われたことのない地域での犠牲者の方が多かったことなど、語り部さんの言葉には強い説得力がありました。

それからいつも仮設住宅に泊めていただいているわかめ漁師さんの仕事を訪問して、メカブの芯切り作業を見学させていただきました。わざわざ子どもたちに見せてくれるためにわかめ全体を切ってきてくださり、メカブを食い荒らす海中のダンゴ虫を見せてもらった時にはびっくり仰天でした。六年間続いた仮設も、今期のわかめ漁が終わる頃には閉鎖されるそうです。

その日の晩は、漁師さんに連れて行ってもらって泊まるようになった峠の温泉宿に泊まりました。ここも避難所として受け入れをしていたところでした。朝食には焼きさんまが丸ごと一本出るのですが、そのさんまを挟んで知り合ったボランティア仲間もいます。

次世代にも継がれる支援へ

三日目の中心は、大川小学校跡地の訪問でした。あそこに逃げていたら助かっていたという裏山のコンクリートを打ったテラスにみんな登って、校舎の残骸と周辺の風景を見渡しながら家族で手を合わせました。私が最初にこの地を訪問した経緯について、「亡くなった児童たちと呼ばれたような気がした」ことを話すと、息子は「お父ちゃんになんて言っても呼んでくれたの？」と真つすぐに質問してきてくれました。「それはね、自分が正しいと思うことなら、先生がこういふことあるんだよ。そうすれば助かっ

たかかもしれない。お父ちゃんは、流された子どもたちから、創造性と自発性を大切に新しい教育の在り方を模索して欲しいって言われて呼ばれたような気がするんだ……」と言うと、涙がこみ上げて来て、それ以上は何も言えませんでした。この時間を一緒に過ごせただけでも、私としては今回の旅の意味が十分あったように思えた瞬間でした。

それから石巻市雄勝の視職人さんを訪ねて、最後は女川病院駐車場でお茶つくクラブをしているご夫妻を訪問しました。震災直後に生まれたという娘さんはこの四月から小学校に上がるということで、家の子どもたちと三人であつという間に仲良くキャンプごっこをして遊んでいました。そろそろ出発だからバイバイだよと声をかける私の胸がキリリと痛みました。彼らの友情が次世代の支援の在り方を模索するための絆になってくれたらいいなあという願いを込めて、私たちの被災地訪問が終わりました。

訪問が終わりました。(つづく)

●井上ウイマラ 1959(昭和34)年山梨県生まれ。京大哲学科中退。曹洞禪とテラワダ仏教を学びカナダ、英国、米国で瞑想指導しながら心理療法を学ぶ。マサチューセ

→ツツ州バリー仏教研究所客員研究員を経てマサチューセッツ大医学部ストレス緩和プログラム特待生研修修了。2013年より高野山大教授。著書『見つめてごらん』他多数。